令和４年度　第２回田原市図書館協議会議事録

日時：令和４年１１月１８日　午後２時～午後４時
場所：田原文化会館２０４会議室
出席者：協議会委員９名
（鈴木、本田、中島、別所、一ツ田、内浦、小澤、北原、永田）
事務局３名（是住、朽名、宮嶋）

議事内容
・開会
・館長あいさつ
・協議
１）前回の議事録の確認について
２）令和４年度田原市図書館事業計画目標達成状況の中間報告について
３）その他
・令和３年度図書館事業年報について
・令和３年度田原市図書館事業評価の公表について
・図書館協議会委員の任命について

事務局：定刻となりましたので、始めさせていただきます。
本日はお忙しいところお集まりいただきありがとうございます。ただいまの出席者は８名であります。過半数に達していますので、平和４年度第２回田原市図書館協議会は成立いたします。はじめに、館長から挨拶をお願いします。

館　長：みなさまこんにちは。本日はお忙しいところ、ご出席くださいましてありがとうございます。本年度は中央図書館が開館 20 年の記念の年ということで、様々な記念行事を開催しています。先月末には、ゲストをお呼びして「ふしぎ文学半島プロジェクト」のトークイベントを開催いたしまして、久しぶりに文学作品の魅力に浸ることができ、参加者の読書意欲を刺激していただいたイベントとなりました。
今月 20 日には、農カードマルシェとトマト王子のトークイベントもございます。市全体もイベントの開催が戻ってきていまして、特に秋はあちこちでイベントが開催されます。トマト王子のトークイベントはヤクルト１０００の開発者の方の講演会と重なってしまい、集客が心配な面もありますが、ぜひお時間のある方はお越しいただき、一緒に農業を盛り上げていただければと思います。
　またお配りしています、今月号の広報たはらは図書館特集となっていまして、8ページにわたる記事が掲載されています。豊橋にお住いの方もいらっしゃいますので、ぜひご覧いただければとお配りいたしました。

さて、前回の協議会はご欠席となっていた鈴木美保先生のご紹介をさせていただきます。令和４年４月１日の人事異動によりまして、河合委員長の後任として、令和４年４月１５日付で伊良湖岬小学校の鈴木校長先生が新たに委員となられました。また、前回の協議会で委員長に選出されました。では、先生、一言ごあいさついただければと思います。

委員長：この度、伊良湖岬小学校の校長になりました鈴木美保と申します。昨年度まで市役所の学校教育課におりまして、是住館長にはいろいろな意味で助けていただいて、学校教育においても、図書館に協力していただきました。現場に戻って子供たちの様子を見ていると、移動図書館「やしの実号」が月に１回来るのをとても楽しみにしていて、教室にいつもいろいろな本が置いてあるのがとてもいい環境で、本当にありがたいと思っております。広報たはらを見て、この図書館が開館してもう２０年になるんだと思いました。出来た頃は自分の子どもたちを連れてよく来ていたことも思い出されます。田原の図書館は、田原市民の自慢の図書館なので、これからますます発展していくよう、協議会の仲間に加えていただいたことを感謝申し上げて、今後ともよろしくお願いしたいと思います。

事務局：ここからは、鈴木委員長に議事の進行をお願いしたいと思います。

委員長:それでは協議事項１「前回の議事録の確認について」事務局の説明をお願いします。

館　長：前回の議事録の確認をさせていただきます。議事録の案を開催通知のお知らせと一緒にお送りしておりました。何か修正事項やお気づきのことがございましたら、教えていただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

副委員長：２ページの下から８行目の「異議なし」の漢字が違っているので修正していただければ。

館　長：ありがとうございます。修正させていただきます。他はよろしいでしょうか。無いようでしたら、ご指摘いただいた部分を修正させていただきまして、図書館のホームページの図書館協議会のページで公開します。

委員長：ではホームページに更新されるということですので、ご承知おきください。
それでは、協議議事項２の「令和４年度田原市図書館事業計画目標達成状況の中間報告について」事務局から説明をお願いします。

館　長：(資料に基づいて説明)
ご質問等ございましたら、よろしくお願いします。

委　員：2ページの2－1－3の説明で、田園都市構想というのを政府が進めているということだそうだが、それに応募すると学校図書館の電算化に関する予算が付くかもしれないとあったが、どういうことか。

館　長：田原市の全部の小中学校の図書館のシステム化を行うための予算となると、かなりの金額になってしまい、予算化されるということが現状では難しい状況となっています。そこで国の交付金を活用して実現できないかと考えているものです。前回の募集時に日進市が同じように、学校図書館と公共図書館とをネットワークでつないで本の情報をやり取りできるという事業を申請して採択されていた事例があります。そういった先進的な事例を横展開でスライドしていくことが、全国的に良い事例の導入が早く進むということで推奨されています。その枠の募集があれば手を挙げていきたいと考えています。

委　員：市役所ではどこが担当の課になるのか。

館　長：教育部の中で、学校教育課や教育総務課と図書館とが連携して進めていくことになると思う。

委員長：学校の本を購入するときに、バーコードを付けて納品してもらっていて、いつでもバーコードをスキャンして貸し出しができるようにしていただいている。学校図書館にコンピューターが入れば、子どもたちも貸出がスピーディーにできる。

委　員：教員の労働軽減にはなるのか。

委員長：バーコードを使って貸出ができるとかなり省力化になり、指導する面でも負担はかなり少なくなると思う。

委　員：1－1の課題解決支援サービスの2番のデータベースとありますが、これは具体的にどのようなものなのか。今、福江高校の観光ビジネスコースの支援をしているが、いろいろなビジネスコンテストに応募する中で、質問が多く出てくる。全部に答えられなくて、ここに投げたら答えが出てくるのかと思ったので。

館　長：契約しているデータベースとしましては、国立国会図書館のデジタルコレクション。これは著作権が切れた古い資料とかになるので、ビジネスとはまたちょっと違うかもしれません。それから新聞のデータベースがあります。朝日新聞のデータベースと、中日新聞のデータベースがありまして、かなり古い記事から新しい記事まで、キーワードでも検索ができる。新聞のデータベースは、職員が行政議会支援サービ

スのレファレンスで、あるテーマに関する先進事例とか、こういう取り組みをやっている自治体の事例が欲しいとか、そういった時に検索をすると、たくさんヒットしてきます。図書などの文献にはなるにはタイムラグがありますが、新聞は結構早いです。そういった事例をいくつも抽出して提供することを、職員は日常的にしています。それから、ルーラル電子図書館。田原は農業生産が盛んということで、これは農文協（農山漁村文化協会）という農業関係の出版社が運営しているデータベースで、例えば農作物の育て方とか、農業関係の事例がたくさん搭載されています。レファレンスで農業関係のことを言われた時に使っている。（官報掲載情報を検索することができるデータベース、独自に蓄積している田原市新聞記事見出しデータベースもある）

契約しているデータベースについては、存在を知っていて、どういう時に使えばいいのかがわかっている人など、特定の人に使われていて、一般の利用者にはなかなか使われていない。レファレンスで職員は業務では使っているのですけれども、利用者からも使われないと、何で契約してるんだということになっちゃうので、何とか知っていただいて、利用につなげることができればと考えています。

ビジネス関係で言えば、前に日経テレコンという新聞・雑誌記事を中心に、国内外の企業データベースなど、幅広いビジネス情報を収録しているデータベースも契約していたのですけど、あまり使われなく、データベースの予算も切らざるを得なくなった時に、契約をやめたということがあります。福江高校がビジネスコンテストとかで頻繁に使っていくということになると、このデータベースが必要ということで再度契約ができることもあると思います。

委　員：1 ページの 1-1-3 の行政議会支援サービスの利用実績（受付件数）が 66 件と書いてあるが、行政議会支援サービスというのは議員が図書館に問い合わせたとか、そういう数になるのか。

館　長：配布している図書館事業年報をご覧ください。18 ページの行政議会支援サービスというところに、統計を掲載しています。そこに種別がございまして、調査というのは、行政の各部局からの調査依頼、また、議員の場合は、議会事務局を通じた調査依頼が図書館に寄せられますので、その受付件数となります。他に、コピーをお送りする複写や、現物の資料の貸出などもしています。展示につきましては、主に市役所の各部署が施策を RP したい場合に、チラシやポスターと関連する図書を図書館の中で展示をするものになります。パブリックコメントも図書館の中でコーナーを設けて、計画案と関連図書を設置して、市民が意見を出せるようにしています。学校教育支援というのは、今まで学校の先生方の調査依頼などの要望は別で受付していたのですが、この行政議会支援サービスに含めて対応しているものになります。市民館からもこの様式でいろんな依頼をしていただけるよう周知しています。そういった行政議会支援サービスの受付件数を実績として掲載しています。

委　員：市民まつりでも多くの議員が参加してブースを出して個別の相談にも応じていた。前進だなと思う。

館　長：例年、市民まつりの前に、図書館の中で議会活動の紹介展示をしている。議員のおすすめ本なども併せて展示している。そういった活動や、議員とたはらトークなども通じて、議員が市民の声を聞くことのできる機会を増やしているのだと思われる。

委　員：前に図書館で開催した議員とたはらトークでは、ハンディキャップのある人たちがたくさん参加していた。議員が優しく接していて、しっかり話を聞いていた。それ以降、図書館のイベントにもハンディキャップのある方々が積極的に参加されているような変化が起きていると思う。

館　長：ふしぎ文学プロジェクトの講演会にも参加してくださっていた。図書館のことを身近に感じてくれて、最近はいろんなイベントに参加してくれていると思う。

委　員：図書館がやっている住民のためのサービスがかなり進化していると思う。ただ、図書館が情報の便利屋であっていいのかとも思う。簡単に手に入る情報を求める、要望にだけ応えるのはどうか。知的な想像力を養う、つまりインフォメーションだけじゃなくてカルチャーを育て深める、そういうことが図書館だけじゃなくて学校も必要なのではないか。今は自分の頭を使って考えることが面倒で、上からの指示に従ってやっていくというか、複雑系の思考がない。だから住民サービスとして便利屋さんとして行くだけではいけないと思う。

館　長：久しぶりに「ふしぎ文学半島プロジェクト」を開催しまして、2 階のふしぎ図書館コーナーでゲストの方達とも意見交換をしたのですが、金原瑞人さんも貴重な図書を持っている人がたくさんいるのだけれど、その人が亡くなった時に図書が散逸してしまって、どうにかならないのかとおっしゃっていた。図書館がすべてを受け入れるのは難しいのですが、豊橋もまちなか図書館ができる時に「まちじゅう図書館」という取り組みもされた。田原もせっかく「ふしぎ文学半島」と言っているのですから、「まちじゅうふしぎ文学半島」として図書館だけじゃなく、半島中で取り組みができることを考えてもいいのではないかという発言をさせていただいた。漠然としているが、みんなで取り組むことができればと考えている。

委　員：新しい知の創造の拠点というのは図書館でやってもらうのだが、情報サービスをやってそれでおしまいというのではなくて、自分で考えてものを作るということが必要。

館　長：先生たちの多忙化解消もあって、子どもたちの放課後の活動が、学校での部活動から地域へのシフトが始まろうとしている。今、田原中学校のボランティアグループ「たはランティア」の生徒たちが、リサイクルブックオフィスの店番をしてくれるようになっている。そういった地域での活動の時間を利用して子どもたちが本に触れて考えたりすることができればよいと思う。

委　員：文科省はアクティブラーニングという言葉を使っているのだけれど、実際は機能していないような気がして、安易な形で進んでいくといけない。自ら気づいて成長していくことが大事だと思う。GIGA 構想も便利になって良いのだけど、便利なだけで、子どもが想像力豊かな人間に育っていけるのか、そうは言えないと思う。

委　員：たはランティアの活動を見ていても、子どもたちが社会活動、市民活動をやりたいという意欲が強く感じられる。そういう活動をやりたいからリサイクルブックオフィスの店番をやりたいと。そこでいろんな人とも会えるし、勉強もできるからと。だから参加したと言っていた。11 月は見習いということで大人たちと一緒にボランティア活動をして、12 月からは 1 人でできるように頑張ろうと、だんだん馴染んでいくような形にしている。本来なら学校に出向いたり、手間がかかることがあると思う。民間との付き合い方が難しいのではないかと思うが、先生たちの理解や、子どもたちを社会に送り出したいという気持ちを感じた。時代が変わって来たなと思う。

委　員：私の所ではボランティア活動をやるのだけど、若いお母さんたちが子どもたちを連れてくる。昔だったら学校の先生が活動の場所に来てくれるというのはあまり考えられなかった。今は先生方が率先して来てくれる。みんなで歌を歌ったりして、若い人たちはすぐに歌詞が分からないとスマホを出して調べてくれる。時代が変わってきた。今、2 校の中学校にボランティアサークルができている。残りの中学校にもボランティアサークルを作ると田原の将来は明るくなると思う。若い人たちは正しいことをしたい。そこを担っていくのが大人の責任ではないかと思って、地域で小さな活動を継続している。小さな活動も必ず大きな力になる。そういった子どもたちを育てるのはすごく大事なことだと思う。

委　員：ふしぎ文学半島プロジェクトというのはどういうものなのか。

館　長：元になったのは泉鏡花の姪の名月さんが田原市出身で、鏡花文学の推進活動などをしていた。その名月さんが亡くなられてご遺族がまとまったコレクションを図書館に寄贈してくださった。それを記念して中央図書館の 2 階に鏡花作品やその他の幻想文学などを集めて「ふしぎ図書館」コーナーとして 10 年前に設置したのが始まりで、以降、ふしぎ文学半島プロジェクトとして、講演会などのさまざまな行事

を開催している。

委　員：コーナーを作るにあたって、ものすごい量の幻想文学とか妖怪民俗関係の本を、元館長を中心に集めたそうです。貴重なものは古書店から入手した。先日のイベントで登壇された東雅夫さんや金原瑞人さんが、全国を見てもこれほど揃っている図書館は無いから、田原だけで、一部の愛好家に知られているだけではもったいないからもっと皆さんに知ってもらう、活用してもらいたいとおっしゃっていた。

館　長：毎年、先生方に本を選書していただいて本を増やしているので、面白いコレクションになっているかと思う。

委　員：妖怪に興味を持っている人は地域に結構いるので、そういう話を聞きたい人はいっぱいいる。そういう人達を巻き込むことができればうまくいくのではないか。あまりにも学術専門的だと市民は難しいかもしれない。

館　長：これまでも地域の民話が紙芝居になったり、入りやすいコンテンツも増えてきてはいる。ちょうど今回 10 周年ということで、皆さんもご存じなかったように知らない人がたくさんいると思うので、もっと PR を強めていきたい。

委　員：一番初めの頃に、バスツアーで渥美半島の先など伝説が残るスポットを巡る企画もあった。その時もすごく盛り上がった。今回のふしぎ文学半島プロジェクトは初心に立ち返るという内容で、和（日本文学）の東さんと洋（西洋文学）の金原さんが解説をしてくれた。参加者が 30 人くらいいたが、2 階にも上がって身近な話もできた。参加した人が、こんなにじっくり文学の話やディスカッションができたのはすごく久しぶりだねと実感していた。こういう時間をつくってくれる図書館を期待していると言っていた。探求心が満たされるような会になった。最近では珍しい。良い会になった。

委　員：小川雅魚先生から、渥美半島への移住希望者が多いよという話から、ここは縄文時代、全国一人口が多いところだったと聞いた。ちゃんと文献もあるとか。舟をこいで伊勢志摩の方まで行っていた。渥美半島は貝も豊富だったので人も集まってきたと。縄文時代のことが研究で分かるのかと思った。ふしぎな半島というのを聞いて、そういうことと繋がっているのかと感じた。

館　長：小川雅魚先生もそういったお話が得意なので、小川雅魚先生と金原瑞人さんのトークイベントなどがあっても面白いかもしれない。

委　員：4 ページの 3-1-1 のふるさと学習のところ。豊橋はテーマ別リストとかあまり聞い

たことが無くて、これはすごい取り組みだと思う。郷土資料の読み込みがあるので、司書の育成から必要ですよね。小泉八雲の曾孫さんの小泉凡さん（民俗学者）とも話していたが、地域の資源の死蔵問題が深刻。文化資源・地域資源を価値あるものとしていかに死蔵させないか。先人たちが与えてくれるヒントと断絶させられている。司書は小中学生が学ぶための船頭じゃないが、内容別、テーマ別のリストを作成していただくことが必要だと思う。地域の情報がネットに上がっていない。ここが断絶のもう一つの壁で、ネットに上がっていない地域の情報をどう探していくか。地域に住んでいた先人たちが何を考えていたのか、そこにたどり着けるかを今の子どもたちはネットしか頼れなくなってきているけれど、司書が橋渡し役になってくれないと死蔵してしまう。

委　員：むしろ学校の先生の方がそういった役割が必要ではないか。

委　員：社会科の先生たちを除いたら難しいのではないか。連携事業になるがふるさと教育を司書や学芸員、郷土史家の人たちが持っているものをつなぐ役割になってくると思うので、ぜひ作成してほしい。また、広報たはらに載っている、司書が選ぶおすすめ本。こんな感じで手間をかけなくてもよいので、司書がふるさと学習に役立つ資料をお勧めしてくれるとよい。

館　長：ふるさと教育センターの職員で、元博物館の館長は、過去の映像でこれもある、あれもあると、知っている人の頭の中ではたくさん出てくるのですが、それが他の人では分からない。学校司書の意見だと、今の子どもが読める郷土資料が少なくて、どれも難しい。しかもみんな動画に慣れていて、動画でほしいと言われてしまうそうです。ケーブルテレビの取材でも過去の蓄積が結構あるそうです。二次利用してよいのだったら、収集して分類して分かりやすいところに置いておくということもできるのではないか。

委　員：子どもが見て分かりやすいビジュアルだったら大人も見るから、まずは子ども向けから進めて行ったらよいのではないか。あと、お散歩 e 本は先駆けてコンテンツ化してあるので、タブレットにコンテンツとして入れてもらったらどうか。朝読の時間に読んでもらうと良い。

委　員：お散歩 e 本を作った時に、いろいろな地域の方にお話を聞きに行っているところも映像化して残っているのではないか。ウェブサイトに上がっているので、学校教育現場でも活用できるのではないか。

委員長：本来、子どもたちは地域で育てていくという考えもあったが、今までは学校が子どもたちを学校内に抱えこんでいた。文科省からも、これからは地域全体で子どもた

ちを育てていくという方針も出ている。地域のいろいろな知識は、専門家や教員だけでは補えない。放課後に市民館などで大人と一緒に学ぶとか、中学生と小学生が一緒に学ぶとか、そういうことが将来的に目指す方向なのかと思う。田原では郷土のことを研究し、伝える活動をしている方々がいる。図書館や博物館で繋がっていけると良いと思う。

委　員：学校での読書指導はどういう状況なのか

委　員：子どもは両極端に分かれている。読む子はすごく読むし、読まない子は全く読まない。ただ、今まで読まなかった男の子が、友達の女の子に勧められて子ども向けの恋愛小説を読み始めた事例があった。自分が子どもの頃に比べると性別の差もなくなってきていると思う。

委員長：教科書で新美南吉の「ごんぎつね」が出てくると、じゃあ、いずみ号などで新美南吉の他の本を読んでみようとなったり、そういったきっかけも多い。

館　長：今、名作と言われている作品も、装丁を今どきの子どもたちに好まれるようなものに変わっている。学校図書館協議会の調査によると、子ども達が本を選ぶ要素として、1番がタイトルで2番が表紙という結果だった。子ども達はその二つが魅力的でないとなかなか手に取らないことが分かっているので、各出版社も工夫をしている。

委員長：それでは意見をたくさん出していただきましたので、以上で協議事項を終了します。その他で事務局からございますか。

館　長：令和3年度の図書館事業年報をお配りしております。昨年度の取組みや統計資料が掲載されていますので、ご参考にしていただければと思います。また、令和3年度の図書館事業評価もお配りしています。図書館協議会で外部評価の一環として図書館の取組みに対して評価をしていただいた内容を盛り込んで作成したものです。こちらの内容はホームページでも公開しております。

　そして、図書館協議会委員の任命についてです。2年間の任期がこの11月30日で終了いたします。現委員の中島副委員長と別所委員が今期をもって終了されます。お二人とも長年にわたり図書館協議会委員としてお世話になりました。一言ずつご挨拶をお願いします。

中島副委員長：初めて図書館協議会にお世話になったのが、豊橋市中央図書館の司書の方の後任でということで、森下館長の時にお話をいただきまして、そこから豊田館長、是住館長の時までお世話になりました。昔の協議会でどういうことをやっているか

を新しい方は知らないと思いまして、パソコンに入っていた当時の宿題をご参考までにお渡ししたいと思います。今は話し合いが中心の図書館協議会ですが、森下館長の時は先進図書館の視察など、バスをチャーターして出かけて行ったこともあった。その時に森下館長からレポートの宿題をいただきまして、各自で見たことや聞いたこと、感じたことをレポートしたという懐かしい思い出がある。初期の頃から今まで見続けてきて、だんだん進化していくのを目の当たりにしてきた。力不足で至らないことは多かったかと思いますが、私の退職も近いということで後任の方にバトンタッチをさせていただきたいと思います。今までありがとうございました。

別所委員：私はこの協議会では教員を代表する発言をしてきています。長い教員生活の中では図書館部に所属していた。知識の拠点としての図書館を守ろうということで図書館に対しての思いは非常に強い。私自身の問題意識の変遷をということで、時習館高校で退職を迎えた時の文章から最近の東日新聞に寄稿した文章まで、いくつかお配りした。最近、ウェブ上でいろんな情報が広がってきているけれど、活字メディアというのがギリギリ最後のところでは拠点になるんじゃないかと、そういうことを思います。自分の言葉で考えるということです。これから私は、漱石の「三四郎」に出てくる「偉大なる暗闇」になれたらと考えている。うるさい暗闇かもしれないが。身体が続く限り何とかやっていきたい。お世話になりました。

事務局：それでは協議会としてはこれで終了させていただきます。ありがとうございました。